エッセイ

阿新路の牧水碑・あれこれ

獨協大学教授・鈴木　康治

1.旅の始まり

人生にはさまざまなことが思いがけずに起こり、そのことを回って、ひとは喜びもし又悲しみもする。

ある年齢に達してみると、そのことが分る所か、受けとめにおいてとかく鈍感にもなり易いことが分る。素直になれないというよりもやはり、自己客観視が、いわば金縛りにでもするのであろうか。

四囲に逝く人が増えて来、幽冥境を異にする知人が多くなる。筆者の旧制高校仲間（文乙）は半数近く減った。毎日の新聞の社会覧の黒枠は必見の場となる。

少し以前には、時たまの入院中につき放置の止むなきに至ったり、又、不測の痛みを起して通院等、立ち居ふる舞いが思うにまかせず、正座に堪えられない事情から、御葬儀関係はなるべく遠慮させて頂いている。勿論、哀悼の意は表するが。粉砕骨折二カ所というだけ、予後のさまは必ずしも人の見えるところではなく、足投げ出して座らせて頂く訳にもゆかないからである。おまけに椅子席でも、しびれが（鬱血）が起ることあって、極めて行儀上宜しくない。

さて私事であるが、老少不定の古さ実感させる妻の死（筆者の入院時、毎日見舞いの妻が今度は逆に、連日見舞いに出会うという事態）に会い、メラノームという病の故に、転移も早く四ヶ月の短い間だった。担当医の告知（手術による切除、のち化学療法）により、延命治療の難しさを体験した。進行と予後の悪さは予想を上廻るものであった。ま、ケアはやれる限りでやったと思っている。女の患者の扱いは難しいが、ナースは協力的だったので助かった。

その妻の死から一年有半で、やっと月遅れの一周忌らしいものを上野精養軒で設営した。己れの体調不全により、検査、検査を重ねたことが遅れの主な原因だった。無罪放免ではなく、微罪釈放、保護観察の身といったあんばいで、人のお手伝いを頂き乍ら、ごくごく身近の人たちに限定して人数も絞った。

当初より三十人前後と予定していたが、結果として欠席者（最初から不参が予想されていても、お義理から止むをえず御案内した分もある）の予想が当たって、思った通りの運びとなった。尤も、数の上から失礼とは思い乍ら、案内を省略させて頂いた方々もあって、申し訳ない次第と思っている。

会は此方の一種の決意で、「忘れの会」とした。そして逆説的だが遺影を用意した。

浅草ビューホテルでの「偲ぶ会」（アメ・フトに依頼した）、上野精養軒での「忘れの会」とあれば、泉下の妻も少しは笑みを返してくれるものと信じている。

日比谷花壇の真紅の薔薇集めには苦心した。仲々注文通りにならず、気温と花の開きのこともあったからである。多くの大輪の薔薇は故人の好みだった。のち、参加者にお持ち頂いた。

お集まり頂いた方々には失礼のないよう手配方に腐心した。遠くからとか暑さとかを考慮し、開宴前から随時、お好みの飲み物が召し上がれるように指示しており、御満足頂けたかと思っている。かつての日、この精養軒で結婚披露をし、当時でも一人平均、ある額をかけていたが、来客の中には飲み物の追加要求があったりした。大声あげなくても、その程度すぐにも補充できたものである。その点、立食パーティーは気楽である。まして今回は、精養軒側に多大な御協力を頂いた。人さまのお蔭でもある。獨協OBの山崎兄（アメ・フト尚志会長）には感謝尽くることがない。紙上を借

りて御礼申し上げる。この偲ぶ会、忘れの会のいずれにも御出席を頂き、それに御挨拶も頂戴した方に脇本先生が居られる。そして比較的よくお会いする吉村先生（獨協医科大前学長、宗教学会時の公開講演者）がお誘いはいつでもおうけくださるとのこと。そして脇本先生との御対談をことの他お楽しみにしておられた。

かっこつけのため両先生にお出まし頂いたのではなく、「死の問題」の出版を回っての御相談のことがあった。理系の本は解説さえ難しい。傍らで両先生のお話を伺っていたが、量子論的生命観の最初から筆者はお手上げだった。

脇本先生は御挨拶の中で、前回の偲ぶ会で筆者の用いた忍辱という概念に注目され、奇異というよりもそれがキリスト教の愛に共通するものであることを強調された。筆者のキリスト教信仰の立場をよく御理解下さったゆえである。それは故人の晩年の在り方ばかりではなく、故人放ったらかしの亭主（筆者自身のこと）への自己慰籍でもあった。

このconsolationこそ内心のdesolationを補って余りあるものであった。マルコ伝には「終わりまで耐え忍ぶ者は救わるべし」とある。まことに身勝手だとしても、人は何れ主の前に立たねばならぬ。生の逆説が生の現実だったからである。

2.わが山路行

所で私立大学は大凡、七十才をもって現役定年(停年ではあるまい)であり、筆者も又、首の皮一枚の所にある。

教養部長四年就任のため、独乙、デュースブレグ大学の客員教授のこと（ヤパノロギーを自分なりに稚拙にでも表現したかったし、勧められてもいた。文学と宗教の狭間等）はいつしか遠くなり、そして獨協大学での日本宗教学会のこと、自動車事故を連年の如く続き、従って91年以降はリハビリに努めざるをえなく、到頭、サバチカル・イヤーもとりえずに至って了った。代わりにと言っても変な言い方だが、オープン・カレッヂ講師を、93・94・95・96（今年の予定）を続け、総計三十三回に達しようとしている。一回90分、受講生は十二・三人から二十七・八人とバラつきはあるが。

準備に追われることはむしろプラスである。己のためには仕上げの感が強い。

それにしても現役で少しばかり、ゼニが懐にある中に、好きな場所を選んで気分転換を図ってみたいものと思っていた。慰労なのか、発散なのか、思いつくままを地でゆきたいと。

八月にはアメ・フトの合宿が例年あり、いつも参加しているが、今年も要請があり、その後、娘に乞われて金沢行きが決まっており、更に九月中旬は国学院大での学会、末は旧勤務校のある会合と行事はつまっている。従って七月の前期テスト前が狙い目であった。

加え、個人研究室のなかの本棚の整理、それに我が家の本棚の整理が関わる。非常勤二年ほどの講義を残しているため、蔵書はめちゃめちゃにはできない。いわゆる色分けしておく要がある。おまけに事故にあって以来、右足は少しく不自由。痺れがすぐにたまり易い。湿気は禁物である。しびれるからである。

ま、念頭の蘭州（夜光杯はあるが美酒と酒泉行はまだ）は無理として、そこで思い浮かんだのは友人の話のたねによく出る、若山牧水の若き日のこと、特に中国旅行（高粱川と吉備の山々、そして幾山河）である。

今は国内旅行も便利になっており、歩きはかなり省略しうる。雨にあたらなければ、背荷物にしてザックを背負い、杖さえもてば山道を抜けることもさして苦にはなるまいと思われた。唯一の自戒（むしろ持戒）はのみすぎないこと、ころばないこと、それに尽きる。雨降って地面が濡れていると、近頃よく滑って背・腰を打つ。時に痛む。それに方向音痴なので、道に迷いはせぬかとの不安がたえずつきまとう。だが生来の楽天さがそれを上廻った。つまり、出かけを決定的にしたのである。独り旅でも国内ならである。

若山牧水の乗った岡山からの湛井線は現在なく、吉備線を含んだ伯備線（伯耆・備中）として総社を経、高粱、新見の町がある。然しそれらの街に興味はない。

新見から備中神代を分岐点として、芸備線（備中・備後・安芸）となり、広島県境の東城を経る。

その先きは備中落合、南下して塩町を経て広島に到る。尚、塩町・福山間には福塩線がある。

このことを記したのは、牧水の歩いた当時、それらの線が無く、主要幹線たる山陽線に出ることを考えてみると、近いのは、東城から油木を経て福山の方向である。西城を経て広島へともなると、北上してから南下であって、倍はかかろう。牧水は一日、三・四キロ程の里程はこなしていたらしいから(子息の言)、多分に福山に出たのではないかと推測される。一日泊まりですむし、帝釈峡を経て三・四日もかけて、広島に出たとは考えにくい。のち耶馬渓での歌はあっても帝釈峡のはない。

湛井線に乗って総社あたりから高梁へは手頃、そして新見へは三十キロぐらい、東城へは山越え二十五キロ程、そして福山へは六十キロである。

行きくれて泊まることのありえた事態（幾山河然り）からして、一泊の事態はありえたであろう。尚、福山周辺には鞆の浦がある。直接関係はないが、胸を病が離家するまで、園田小衣子（五年の主）が住んでいた場所である。筆者もかつての日、車で案内されたことがある。狭い街並みだったと記憶している。

こうしてみると、新見ではJRを利用し、そのあと地図を頼って山歩きし、ともかく東城まで出ること、その間の苦坂峠、二本松峠を越える、これがかの幾山河歌い出しの地であることが大体分かった。

東城と福山の間には、数少ないがバスが走っている。その道は牧水が歩いたのかもしれず、田舎道（当初、東城川沿い、この川はやがてダムを形成して高梁川に注ぐらしい）は旧道として、そう変化していないものと思われる。新道開発は幹線に限られそうである。

こうして、岡山・新見・東城・福島の経路は決まった。すると後は時間あわせをする要があった。帰路、福山から浜松に至り、在住の娘夫婦と合流し、浜名湖周辺（汽水湖の魚貝に興味）に宿ることにしていた。

JTBの銀座支店で綿密に調べて貰い（その点、若い女子社員には好感がもてる)、大凡の時程表は立った。

朝ひかりで岡山にゆき、すぐに急行やくもに接続し、午後新見に着く。そしてフロントで地理を確かめ、確実さを期することにする。その間ゆっくり、地酒を楽しんで心身を安らがせ、その旅に夢をはせると。そして翌朝八時すぎ車を呼び、人家果てる所（久原）まで乗り、そこから旧道を行く。川面渓、丹霞坂（阿新峡はよく見えない）を経て、備中神代に着く。水田ばかりのなかの無人駅を三つばかり乗り越して野馳駅に着き、そこから二本松峠の牧水碑（幾山河の）を見て引返し、東城まで一駅、そこで福山行きの中国バスを待つ。そして油木を経て夕方福山に出る。

この朝入時から夕刻時までが、この阿新路のハイライトであり、もう旅らしい旅はそれで終わる。あとは福山でおこぜの唐あげを賞味し、他に二・三品、そして地酒をたっぷりで熟睡し、次朝十時頃ひかりで浜松に向かう。できたら浜名湖、弁天島花火大会のさまを眺め見、翌日、人気のない弁天島の割烹料理を心ゆくまで味わう。これが全てであった。

荷物はできるだけ簡略化し、着替えも最小限、岡山県のマップ、大悟法利雄「幾山河越えさり行かば」を持参し、持ち分の金、更に不時の分を深く納めて完了である。

所で、牧水のことに少しく触れてみると、明治四十年六月三十二日新橋を出て、友人らと京都見物の後、神戸で別れ、六月二十九日岡山駅周辺に投宿。このことは、六月二十九日の詩人、正富汪洋あての手紙で分かっている。この後、広島県境の二本松峠泊りで、歌人、有本牧水あての葉書がある。

その中に、けふもまた...幾山河越えさり行かば...の二首があり、この宿に到るまでの感慨であることが分かる。

今はもと、渓谷巡礼の続け、憧れ出る心、思いの凝縮である。

明治四十年八月の「新声」に「旅人」の題で十五首、同四十一年七月の処女歌集「海の声」で十首、のち第三歌集「別離」では九首と整理・整備されてゆく。途時削られた歌もある訳である。

尚、配列としては本来、

海見ても雲あふぎてもあはれわが　おもひはかへる同じ樹蔭に

峡縫ひて我が汽車走る梅雨晴れの　雲さはなれや吉備の山々

ではなかったろうか。神戸で友人を送り、独りになっている。山々に入る関係上、海の眺め、それから温井線上であろう。高梁川西岸は吉備高原となっている。

高梁の城の歌は省かれ、新見での思いはなく、

けふもまたこころの鉦をうち鳴らし　うち鳴らしつつあくがれてゆく

幾山河越えさり行かば寂しさの　はてなむ国ぞけふも旅ゆく

の二首を続こう。

省かれた一首

うつろなる胸にうつりていたづらに　また消えゆきし山河のかず

は、思いはかへる同じ樹蔭に、の裏返しともみられうる。それは二首・耶馬渓にての一首

ただ恋しうらみいかりは影もなし　暮れて旅籠の欄に寄るとき

に相即しよう。力となるよりも、恋の走馬燈である。まして旅立つ前に武蔵野を歩いている。恋ではないと云い張ること自身、それなのであろう。

不在感は失望感ではなく、目にうつる全ては軽い、若き日の恋い始めの苦しみを映し出しているともいえよう。旅にあって思うからでもある。旅出ることは帰ることという所以である。

この恋人を思う臨場感、それは収斂して切迫感ともなり、ただ恋しと歌い出させる。それは尽きるなき思いとして寂しさともなろう。まして川の流れは急流として一を急がせるでもあろう。この急がせられるさきゆき、それはむしろ近づきによるものではなかったのか。このせきたての中にいくつもの山川を見たのである。

この幾山河の歌が認められたのは多分、七月二日か三日のことかと想定される。梅雨時のさなかであるが、それに合わせて筆者も七月四日を出発日とした。96年だからである。

いつもの癖でひかりの食堂にゆくと、比較的すいており、小一時間程同席した主は六十がらみの高校教師あがりで、何か書き物をしていてあきた頃だったらしい。相手欲しさに話がはずみ、独酌も気がひけ、ビールを勧めると、遠慮なくと中瓶乍ら二本、つまみのタン塩も平らげた。当方は己れの独善を内心苦笑し乍ら打ち興じた。JR の食堂から帝国ホテル等は手をひき、現在は日本食堂のみとは気がつかなかった。食堂の出入りが割りと少なかったのは、そのせいかと思ったりもした。世間知はとかく面白く、教えられる所も多い。全てのこと相働きて皆益となるか。新大阪で別れた後、時間ぎりぎりまで大関をたしなんだが、率直に酔えなかった。旅程は始まったばかりだったのである。

乗り継いだ伯備線はガランとした急行で、退屈してうつろに外に見入った。見ると高梁川は左側によりそうように流れていた。平野部なのに波の泡立ちがあり、少しく急流のようである。いくつか短いトンネルを過ぎると川は蛇行しており、汽車は左右に川を進め、一時間一寸で、「布団」の主の里、新見に着いた。降りたって、こんな小駅だとは思わなかった。降りる客は少なく、小雨のせいか街はくすんで見えた。宿はすぐの橋向こうのグランドホテル・みよしやという。人気なく静かである。

午後二時半ともあれば、先ず地酒を傾けることにする。レストランという名の食堂で一時を過ごし、地酒・三光を味わう。くせのない中口の酒である。エサ・エサというので給仕の女の子はひっこみ、年輩者がいろいろ応対してくれた。やはり中年は面白い。但し、名物の鮎はくいそこねた。刺し盛りは何処も余り変わりばえしない。

山路のことでフロントで打ち合わせをする。何人か入れ替わって説明してくれ、概略図も貰った。

窓外の川では魚影が見える。護岸工事のゆき届いた川は、何故か親しめない。急流ともあれば人工的にならす要もあり、区切って放流ともなったろう。然し美感とは遠い。

支配人に朝八時出立、事の手配を頼み、入浴の後、早めの夕食、仮眠する。

ふと七時半の時計に驚き、ベットからころげおち、右膝、右肘をすりむき、フロントをせきたてる。早口なのか二・三人向こうはおし黙っている。外はほぼ昏い。

あれっと思うと、夜と朝のとり違えだった。のみすぎによる錯覚か。失笑が聞こえてくるようで、

部屋に戻り暫し呆けていた。失態。

次朝予定通り出立、車に乗り人家の果てる所まで行った。久原といい、工業団地の近くだった。真直ぐ行くと備中神代につきますよと指示を受け、この旧道を歩き出した。

昨日も今日も小雨。歩き出すと雨が少し強くなって来た。手拭いをほっかぶりし、緩やかな昇り路を歩く。

アスファルト路ゆえ特に急がず、歩みを進めてゆく。全くの山路であり、間もなく両側鬱蒼たる林、時々左側は谷側となり疎らな木々の間から川面が聞こえたりする。小型トラックが二台続いて過ぎた。だらだら坂はずっと続く。その中、視界が開けて三叉路に出る。見ると左手彼方に小駅が見える。離れて二軒ばかり家がある。一応行ってみると案の定、布原駅だった。降りしきる雨の中、下り上りに三十分余ロスして、今度は上がり道をびしょ濡れになり乍ら急ぐ。伯備線はほとんど通らない。後刻分かったが、上下合わせて一日十数本、芸備線用でない急行が一本過ぎた。隣駅から伯備線になる。

もやついているが視界開けて、水田の中をひた走る単線である。

やがて道はゆるい上りを続け、いつか下り道になる。人一人通らず、右側の曲がり角はコンクリート舗装（補強か）の岩肌が時折りあった。

その右側は崖、密林、左側は川音を響かせ薄い林原である。もやのたちこめる中、激しい川瀬の音が聞こえる。あ、これが阿哲峡だなとすぐに分かった。高梁川支流・西川の一渓谷である。下りてゆくゆとりなく、少し見・聞きしてやがて平坦な道に出る。線路を渉って駅の近きを知る。人家とてなく、又、線路を渉って左側に無人の小駅を見る。備中神代である。山あいの中から平坦さに出る。時計は十時、間もなくヂーゼル・カーが来る。降りる人はない。後ろから乗り、七・八人の中年客のジロジロの視線をあびて座る。ほっかぶりのびしょ濡れでリュック背負いの男の現れだったからだろう。

三駅で野馳駅に着く。大凡三十分か。

朽ちかかった無人駅前に、牧水文学碑案内図がある。すぐ傍らにタクシー乗り場がある。駅から十五分くらいと通りすがりの人が教える。その程度の近さなら濡れても歩こうかとしたのが失敗。田舎道歩きの感覚の違いである。旧道の探し探しにてこずるし、案内板三百米を信じて、行けども行けどもの感があった。

安全で分かりよい中国道路を行くと強い雨足の中、トラックがひっきりなしにびゅんびゅんとばす。最初よけていたものの、その中限界をこえてはねを浴び出すと、濡れも手伝ってやけくそに歩いた。かなりしぶきを浴びた。後で分かったが、まきつけた皮のポーチの後ろ側のお札まで濡れてはりついていた。下腹までずぶ濡れで手拭いは何回絞り直したことか。水風呂に入ったも同様であった。

三百米を一キロ程度過ぎ、県境手前を右に曲がり、やっと妙伝寺前に出る。そのあたりの場所に石碑群があり、牧水ゆかりの熊谷屋の無人休息所もあった。四分は悠ににかかったと思う。歩きなど思わず、タクシーを拾えばとつくづく思った。濡れそぼって歩くのも一興だが、雨が激しすぎた。しっとりした雨ではないし、トラックのはねで目に異物感さえある。

さて追悼碑とは一体何か。牧水の内心にある思いと、六十年近く経っての建碑では違和感を感じさせられて当惑だったろう。牧水一人の碑でよかったと思う。あれでは石碑園である。家族、系景の思い入れがあっても、ずっと離れてひっそりとすべきだったろう。妻、子息の偲ぶ思いは分からなくもないが、妻の喜志子自身、旅に在ればと歌っているではないか。いのち光ると牧水一人の渓谷美感でよかったろう。あるひとへの寂寥感の訴えのこともある。歌は略する。

この碑群のためにわざわざ来たのかと拍子抜けしたのも実感である。あるらしい一本松も不明で、四分程徘徊し、今はこれまでと元来た道を引き返した。帰りは往路にましての烈しい雨、洗心どころか己の愚かさをあざ笑うかのようであった。

革靴はふみしめる度に蟹の泡吹く如く吹き出る。雨はすこしあがりになって小型車だけ遠回りに走ってゆくが、大型トラックはすぐ傍らを猛スピードで駆け抜けてゆく。後ろから見ると猛しぶきが分かる。白い歩道線ギリギリをゆく車もある。

濡れにぞ濡れしだが、皮肉にも野馳駅に戻る当たりで雨はあがって来た。

少しばかりの店探しの末、とある食堂に入ったが食欲がわかぬ。思案の末、ラーメンとぬる燗(それはコップ入りだった）をすすることでやっとあたたまって来た。聞けば三光。

そこに若いカップルが来て日替わり定食を頼んでいたが馴染みらしく、こんな人通りのない小食堂（上がり座敷にテーブルが二卓、他にテーブル三卓、椅子十二脚か）で日替わりとは珍しいと思った。座った席には水たまりができ、革靴から水が流れていた。お尻のあとはべっとり型がついてもいた。

少し待って隣駅・東城についた。野馳でタクシーに乗り、記念碑を眺めてから東城に向かえばよかったものをの悔いがある。

東城駅には少ない乍らも駅員がおり、乗降客もある程度であった。

中国バスの発着所はすぐ近くにあったが、三時間ほどの待ち合わせには参った。暇を持て余して食堂探しをしたが、駅周辺にはなかった。あっても休んだりで、その中悪寒を感じ出し、止むなく人の不在を利し、駅のベンチでポロシャツ、シャツ、ズボン、靴下、靴を急ぎ取り換えたが、シャツは皮膚にはりついた形でひっぱるとビリッと破れた。こんな経験は近年始めてである。あの岩木山調査来か。下着着替えのためトイレに入ったが、余りにも汚くあきらめることにした。こうしてあちこち歩き回ることで時間を寒気は過ぎていった。野馳は無人駅なのに近く食堂の、五軒あり、東城は小邑といえどこの辺の中心地なのに、本屋はないし、食堂もやってない。看板あっても休みで歩く人も少ない。

小さなバス待合所は八人程座れるのに荷物を脇におき、来る人を不思議そうに見上げ、席をあける気配は全くない。立っている人が二、三人いるというのに。座っているのは三人である。その後バスが来て、あわてておしあい乗り込む姿に、何故か戦後の一時期を思い出した。それにウラル西のノボシビルスクで、飛行機（イリューシン）に乗り込む人たちの大荷物もち、押しあいへしあいで仲々乗り込めず、互いに怒鳴りあっていたロシヤ人たちのさまも浮かんだ。感性という語が不図よぎった。不快感よりも風物であった。

近郊の東城川の流れは荒い。石もごろごろしている。やはり渓谷の一部であった。中国山系からの流れは何れも早く、護岸工事はみる限りどこででもできている。この流れは方向を同じくして帰心をそそろうものであった。

東城川の奇巌や流れ、それはやがてダムに吸収され、高梁川の支流から本流へと合流する。

四分程で油木に着き(四時すぎ)、乗り換えとなる。すぐ福山行きのバスは下校時の中学生の嬌声、野太い声の交錯で一杯だった。それでも一人の中学生が席を空けてくれた。

実はゼミ学生が目黒里見学園(カトリック教会・サレジオ系）で、中三相手の公民の研究授業あり、訪ねたことがある。小規模だが美しい木立、像が立ち、生徒は女学校特有のうるさきはあったが、野卑ではなかった。対比するのは気の毒だったが、違ったよい一風物だった。

五時すぎて福山駅につき、ホテルのフロントではビショ濡れの宿泊券を丁寧に扱って貰った。随分と人の出入りが多く、とびのったエレベーターでは、3F を押したオッサンが何階と云うので16Fというと、ほう随分高い所だと半ば揶揄しつつ、じゃあと降りていった。

ここ福山ニュー・キャッスルで、又左足中指を痛めた。止血したが、酔わないときにこんなことは珍らしい。ドアのあけしめに不注意だったにすぎないが。

ゲン直しに若いボーイをつかまえ、駅周辺の味の店探しの話に興じた。

入った店では、地酒・三好正宗、それにオコゼの唐あげ、更に岡山のママカリの酢づけ他、まあまあだった。活気は良いが粗野は頂けない。然し福山は通過地点でしかなかった。阿新路の旅が終わった以上、つけ足しである。内実略。あとつけ加えるのは、浜名湖・浜北の花の舞いだけであろう。灘の酒は安定しているが、どこでも入手しうる。以下は私事そのものなので略する。

結び

世間に喧伝される文学散歩は、同じ気分になって、ある種の切迫感をもたないと漫然としたものになる。追体験に類するからである。

渓谷美もさること乍ら、渓流ゆえに思いも足も急がせられるのであろう。

又時代も違い、感慨を異にし、年齢上のこともあって、窓外から眺め見ることで足りるとするのも一興であろう。

元来ユートピア願望は憧れ出る心にあったろうから、時程表作成でことは成り、あとはその確かめにある。その成果は是非の外にあろう。

雨にうたれたことと、新見のしっとりした情感が相即する形で心に残った。酒も。

最後に浜松での娘夫婦の労を多として。